

ドラムへの階段 第16回

《エッセイ版》

佐藤 洋祐

「心技体の磨き方②」さらば、フライド！」

皆様、こんにちは！今年もセミの鳴く暑い時期がやってきましたね！

これから数回、「心技体の磨き方」という副題のもと、私の音楽などの修練の方法について触れさせていたきたいと思いますが、その具体的なお話の初回です。何か新たに技術を習得しようという時に、最も大事な要素はなんでしょう？と問われましたら、私は「素直さ」とお答えします。

「素直さ」とは、与えられたものをそのまま受け入れる、何か学ぶ時で言えば、先生の教え、本やインターネットからの情報を曇りなき心で100パーセント受け止める純真さ、ということだと思います。そう、赤ちゃんが、お母さんが口に含ませたものを何の疑いもなく飲み込むように。それがあってはじめて、体に入ったものが一番効率よく身になります。

ところが、この「素直さ」というものを持つことがとってても難しい。「私は素直に聞いていますよ」「先生を尊敬して、おっしゃることは全部受けとめます」と言ってはみても、実際に赤ちゃんなのような素直さを持ってない、何故か？それは、誰しも「フライド」というものを持っているからです。

「私はこれを5年やってきた」「私は下手だけど、ガッツだけは負けない」という気持ち、ありますよね。僕もこういう気持ち、わかります。これが悪いとかではありません。ただ、こういったフライドが、学びを邪魔していたことを、私はニューヨークで身をもって知ったんです。

★佐藤 洋祐（サトウヨウスケ）

ジャズミュージシャン。サックス奏者としてグラミー賞を2度受賞、ノミネートは4度。海外での活躍で世界的に高い評価を得た。その後2015年末千葉県に住まいを移し現在に至る。2019年より日本の歌を唄うシンガーとしても活動を開始。

挿絵 TAKAKO



ニューヨークにはジャズを演奏したい人たちが世界中からたくさん集まってきましたから、中にはその演奏や振る舞いをもって、私の上に書いたようなフライドを打ち負かし、破壊し、撤去してくれる人たちがいたんです。彼らはそんなつもりで私と接していたわけではないと思いますが、そういう触れ合いのおかげで、私は、大事で有益なものがたくさん詰まっていると思っていた自分の「袋」の中身が実は空っぽだったことを知ることができました。自分の演奏技術どころか、ガッツだって全然かなわなかったんですから。

そうやって初めて、袋の中のをいったん全部捨て、好きな音楽を一から学ぼう、という素直な姿勢が生まれたんです。そうすると、どんどん上達していく。なくなっていくと気づく、フライドが学びの障壁だったこと。空っぽの袋に新たな知識経験が急速に取り込まれていくのを体感しました。

ジャズの演奏家に関して言えば、ニューヨークである程度の期間活動していた人は良い技術を持つ人が多いですが、それは彼らが多かれ少なかれ、そういうフライドを捨て去れる経験をしているからであって、現地の優れたミュージシャンや立派な学校から、そこでしか教えてもらえない何か特別なことを教えてもらったからではないんです。

同様に、日本の先達もこんな話しを残しておられます。「いまだ堅固（けんこ）かたほなるより、上手の中にまじりて、毀（そし）り笑はるるにも恥ぢず、つれなく過ぎて嗜む人、天性その骨（こつ）なけれども、道にな

づまず、みだりにせずして年を送れば、堪能（かんのう）の嗜まざるよりは、終（つい）に上手の位にいたり、徳だけ、人に許されて、双（ならび）なき名を得る事なり。（吉田兼好「徒然草」）才能がないと思われる人も、ほとんど上手な人にまじって恥をかきながら修練していけば、天分があつてそれをしない人よりも習熟し、苦勞した経験も含めて人から尊敬されますよ、ということでしょう。どこに住んでいたって、「素直さ」をもって、いつも新鮮な感動と共に学ぶことはできます！やっぱり、人って一人で生きてない。本当にものを学ぼうとするのも、フライドを捨てようとするのも、独りでは難しいものですよね。